

平成 27 年度とちぎっ子学習状況調査報告書の概要

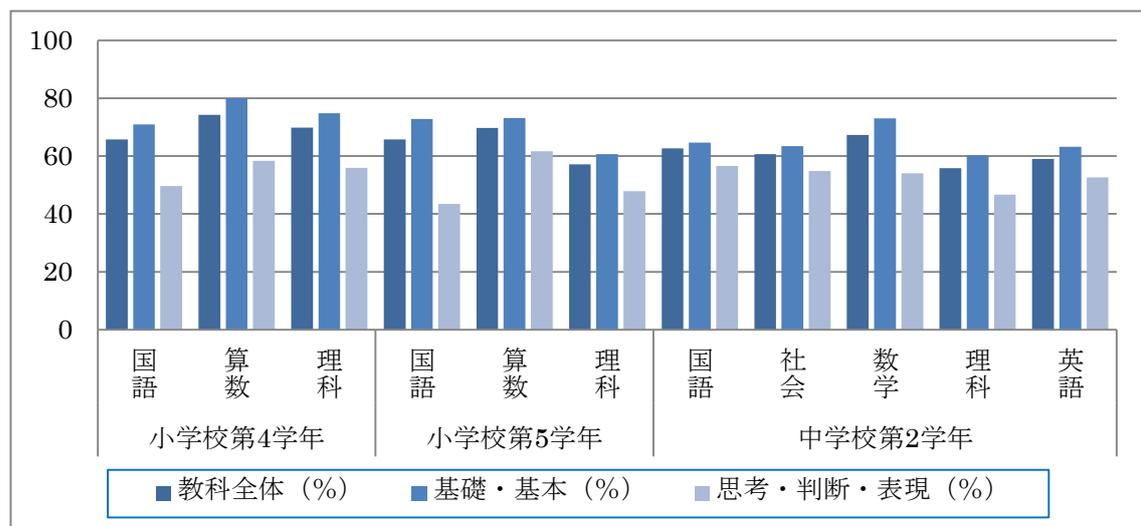
栃木県教育委員会事務局学校教育課

1. 教科に関する調査

平均正答率

(%)

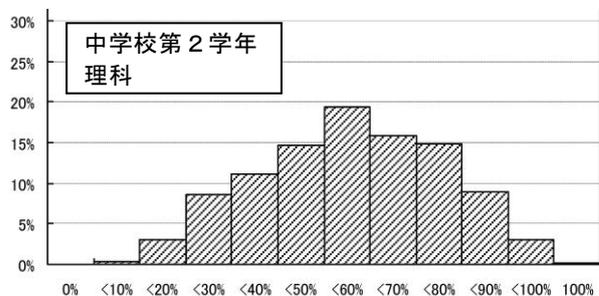
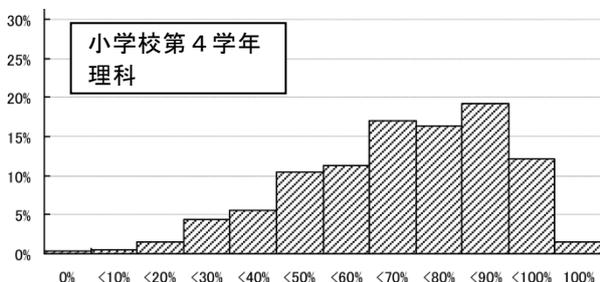
学年	教科	教科全体	基礎・基本	思考・判断・表現
小学校第 4 学年	国語	65.8	70.9	49.7
	算数	74.3	80.0	58.4
	理科	69.9	74.8	55.9
小学校第 5 学年	国語	65.8	72.8	43.5
	算数	69.7	73.2	61.7
	理科	57.2	60.7	47.9
中学校第 2 学年	国語	62.7	64.7	56.6
	社会	60.7	63.4	54.8
	数学	67.3	73.0	54.1
	理科	55.8	60.2	46.7
	英語	59.0	63.2	52.6



(1) 基礎的・基本的な知識・技能に関する問題では、小学校では 6 教科中 5 教科の平均正答率が 70% を超えており、中学校では全ての教科で平均正答率が 60% を超えていることから、全体として基礎的・基本的な知識・技能に関しては、おおむね良好であると考えられる。さらに基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせていくためには、知識・技能を活用する場面を意図的・計画的に位置付けた学習活動を行っていくことが大切である。(p3~5)

(2) 思考力・判断力・表現力等に関する問題では、複数の資料を的確に読み取り、条件に合わせて、自分の考えをまとめて記述する問題の平均正答率が低いことから、引き続き課題が見られる。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、自分の考えをまとめ「記述」する活動と、言葉で人に伝える「説明」「話し合い」といった活動を相互に関連付けることが考えられる。

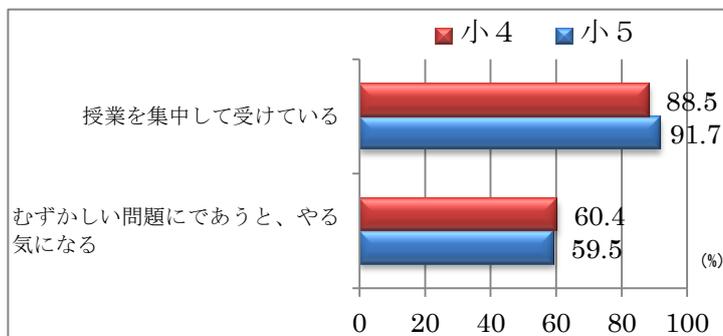
- (3) 学年が上がるにしたがって、正答率度数分布のピークが低くなり、全体としてなだらかな山形となることから、下の学年でのつまずきが、上の学年の学習に影響していることが考えられる。複数の学年で調査問題を積極的に活用し、学習した内容がその学年のうちに身に付いているか確認することが重要である。また、フォローアップシート（復習用資料）の効果的な活用を図るとともに、小・中学校9年間を見通した、系統的な指導が大切である。



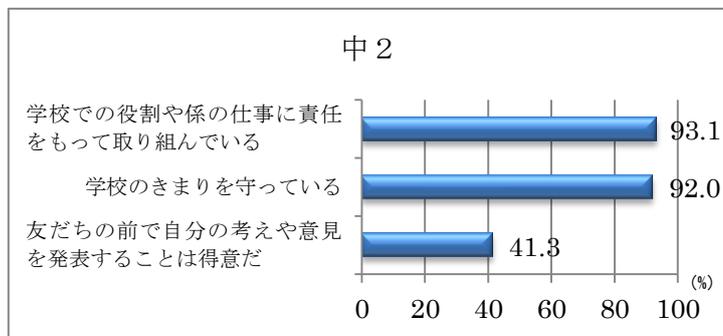
- (4) 理由を説明する記述の問題について無解答率が高くなる傾向にあることから、その原因を探るとともに、自分の考えを文章にまとめる指導の充実が求められる。児童生徒の発達段階や教科の特性を考慮し、記録、要約、説明、論述といった言語活動を効果的に取り入れていくことが考えられる。
- (5) 経年問題では、平成26年度と比較して平均正答率が高くなった一方で、引き続き課題が見られる問題があることが分かる。課題の見られる問題については、今後も重点的に指導改善を図る必要がある。(p31~45)

2. 児童生徒質問紙調査

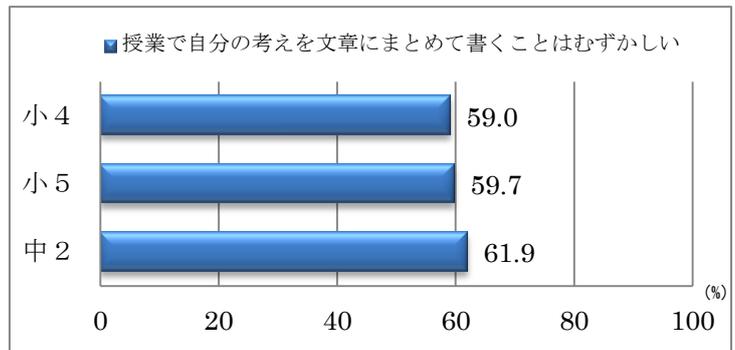
- (1) 小学校4、5年生の多くは、授業を集中して取り組んでいるなど、落ち着いた生活を送っている。(p56) また、「むずかしい問題にであうと、やる気になる」について、児童の約6割が肯定的な回答をしており、昨年度と比較して高くなった。(p54)



- (2) 中学校2年生の多くは、学校での役割や係の仕事に責任をもって取り組んでいる。また、学校のきまりを守って生活している。一方、「友だちの前で自分の考えや意見を発表することは得意だ」については、引き続き肯定的な回答の割合が低い。(p56)



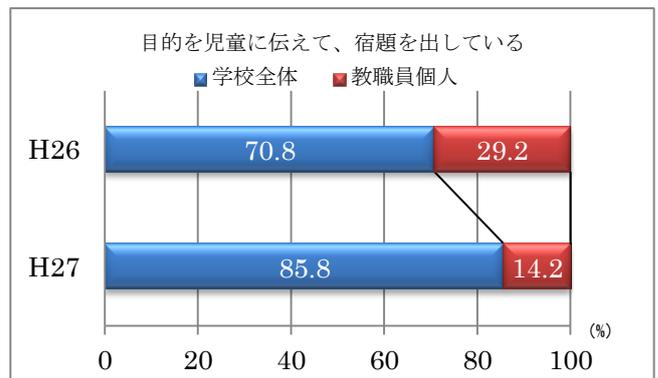
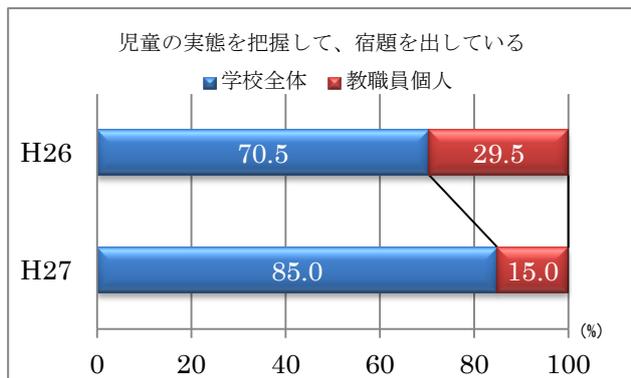
(3) 「自分の考えを文章にまとめて書くことはむずかしい」について、約6割の児童生徒が「はい」「どちらかといえば、はい」と回答している。発達の段階や教科の特性に応じて、教師が意図的・計画的に自分の考えを文章にまとめる指導に力を入れていくことが大切である。(p56)



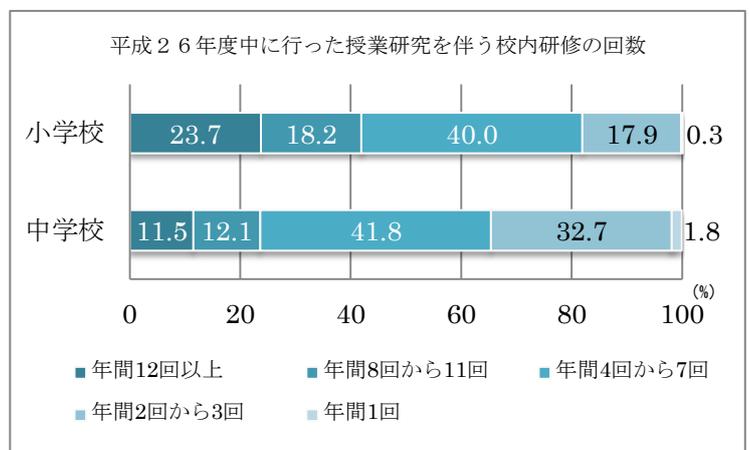
(4) 家庭における学習は、学校の授業の復習をすることやテストで間違えた問題について勉強することに関して、平成26年度と比較すると肯定的な回答の割合が高くなった。(p48) 一方、テレビを見たり、ゲームをしたりする時間については、やや改善が見られるものの、引き続き長い傾向にあることから、節度ある時間の使い方の指導が必要である。(p60)

3. 学校質問紙調査

(1) 「児童の実態を把握して、宿題を出している」や「目的を児童に伝えて、宿題を出している」などについて、学校全体で取り組んでいると回答した学校の割合が平成26年度と比較して高くなっていることから、学校の組織的な取組が進んでいると考えられる。(p82)



(2) 校内研修では、「運営の仕方を工夫したり、全体での研修と小集団での研修を効果的に組み合わせたりする」などについて、肯定的な回答の割合が高くなっている。一方、校内研修の回数が年3回以下の学校が小学校で2割程度、中学校で3割程度であることから、数人の教員で授業を互いに見せ合う機会を増やすなど、実情に応じて研修等の機会を確保する必要がある。(p79)



- (3) 「児童生徒に身に付けさせたい力の確認等のため教員自ら調査問題を解いた」について、「はい」と回答した割合が小学校で2割程度、中学校で1割程度である。積極的に調査問題を活用し、どのような力が求められているかを確認することが大切である。(p80)

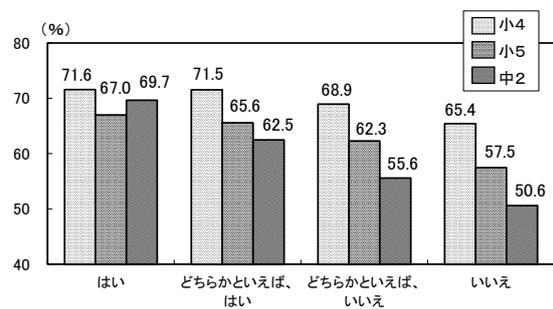
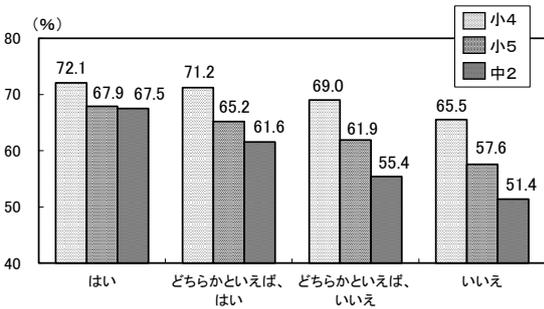
4. 教科に関する調査と児童生徒質問紙調査とのクロス集計

(%)

- (1) 「家で、学校の授業の復習をしている」、「家で、テストでまちがえた問題について勉強をしている」について学力との関連を見ると、学んだことを振り返る習慣が身に付いている児童生徒の方が、教科正答率が高い傾向が見られる。特に中2で顕著である。(p48)

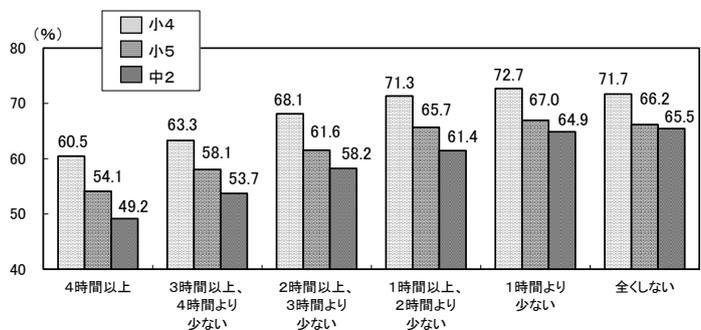
家で、学校の授業の復習をしている

家で、テストでまちがえた問題について勉強をしている



- (2) 平日のゲーム使用時間について学力との関連を見ると、全ての学年で、平日のゲーム使用時間が少ない児童生徒の方が、教科正答率が高い傾向にある。(p61)

ふだん(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームも含む)をしますか



- (3) 平日の携帯電話・スマートフォン使用時間について学力との関連を見ると、全ての学年で、平日の携帯電話・スマートフォン使用時間が少ない児童生徒ほど、教科正答率が高い傾向にある。特に、「もっていない」と使用時間「4時間以上」とで比較すると、教科平均正答率には15~20ポイント程度の差がある。(p63)

ふだん(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか(携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間はのぞく)

